



AFRICAN DEVELOPMENT BANK GROUP

多極化する世界における アフリカ経済の変革

ドナルド・カベルカ博士

総裁

東京大学における講演
東京(日本国)
2013年6月5日

この世界的に有名な教育機関、専門家の言葉を借りれば、アジア随一の大学において、アフリカとその変革についてお話しできることを光栄に存じます。優秀な卒業生の皆さん、総理大臣やノーベル賞受賞者、経済、科学、政治、外交、芸術、文化といった各分野でご活躍の人々が、貴学の実績を十分に物語っております。

本日お招きいただいたことについて、また国連大学がアフリカ開発銀行（AfDB）と共におこなっているアフリカにおける高等教育強化の取り組みについて、国連大学上級副学長の武内[和彦]教授に感謝を捧げたいと存じます。今朝、共同覚書への署名が行われたことをご報告できることを嬉しく思います。

また本日ご多忙のなかご来場くださいました教職員、来賓の皆さまに深い感謝を捧げます。

これまでの 30 年間

本日は、グローバル経済に地殻変動が生じる時代、あるいは多極化経済の世界とも言われる状況におけるアフリカの変革についてお話しするよう依頼されております。この 30 年間は、人類の歴史のなかでも特別な時期でした。世界経済の中心地が変化しただけでなく、人間の状態に対する影響も実に目を見張るものがありました。

1990 年代、絶対的貧困の状態で生活する人は世界で 20 億人を数えました。10 年後、主としてアジアにおける経済の変化の結果として、この数字は半分に減少しました。初期の「アジアの虎」、つまり韓国、シンガポール、タイ、マレーシアなどの勢いに乗り、貿易と投資を通じて、貧困との戦いは中国、インド、インドネシアで新たなレベルに達しました。

ラテンアメリカ経済も同じような道をたどって加速していきました。ハイパーインフレと制御不能の債務、残酷な軍事独裁政権の時代は過去のものとなりました。

アフリカの「合流 (convergence)」

その一方で、アフリカ大陸は部外者であり、グローバル経済の根本的な再編成に取り残され、貧困と停滞に沈んでいるように思われました。今日、私は皆さんに、アフリカの再生の物語、抑圧された大陸というお決まりのイメージにもかかわらず、アフリカがグローバル経済に合流する道を歩んでいる、しかも着実かつ逆戻りしようのない形で進んでいることを示す物語をお伝えしたいと思います。そのプロセスは必ずしも直接的・統一的なものではありません。ときには複雑で混乱しているようにも見えますが、しかしその方向性はしっかりと確立されているように思われます。

私がここで皆さんにお伝えするのは、そのような物語です。アフリカが歩んできた道のり、その新たな活力、新たなエネルギーと自信についてです。

そして今日は、アジア・アフリカにとって、そして世界全体にとって利益となるような協働を深めていくために、皆さんと共に何ができるかを考えてみましょう。

ここで私が示唆したいのは、グローバル経済が景気後退（リセッション）と高失業率という泥沼から抜け出そうとしている今、必要な「再充電」に向けて最も高いポテンシャルを有しているのは、私の大陸であるアフリカのような、新興市場・フロンティア市場であるということです。

とはいえ、自動的にそうなるというわけでも、あらかじめ決まっているわけでもないということは申し上げておきましょう。前提となる条件があります。アフリカの歩む道は、依然として長く困難です。やらなければならない仕事があります。アフリカのパートナーと友人たちが、共通の利益のために、またグローバル経済の繁栄のために一緒にやれることはたくさんあるのです。

TICAD について

そして、それこそがアフリカ開発国際会議（TICAD）の精神なのです。先週、日本は第5回の同会議を主催し、私も参加させていただきました。会議の一つでは議長も務めました。ある意味で、今回の TICAD は 20 年にわたる努力を称えるものでした。というのは、TICAD というイニシアチブは 1990 年代初頭に始まっているからです。開会にあたっての安倍晋三首相の歴史に残る講演、安倍首相とアフリカ首脳との会合（私とも会談していただきました）、そして横浜宣言、これらはすべて、過去 20 年にわたって TICAD が生み出してきたダイナミズムを今後も深めていきたいという希望を示すものです。

1990 年代の動き

1990 年代に TICAD が始まった時点では、それは発起人たちの信念の表明でした。その目標と趣旨は、開発問題、特にアフリカへの関心が弱まりつつあった当時、アフリカの開発を支持する同盟を構築することにあります。TICAD は「アフリカの開発に向けた課題と機会について、世界的な認識を喚起し維持することをめざす」と述べられております。それは、案に相違して、当たり前前のことではなかったのです。

TICAD は「ベルリンの壁」が崩壊し、国際社会の構図が変化しつつあるなかで誕生しました。実際のところ、しばらくのあいだはアフリカ及び低所得国はハシゴから滑り落ちていくように見えました。当時の関心は、自由市場へと移行しつつある東欧諸国、そして東南アジアの「虎」と称される諸国の、さまざまな形態の国家資本主義に支えられた活気ある経済へと向かっていたのです。

アフリカは重要なプレイヤーとは思われていませんでした。実は、広く流布した「アフロペシニズム (Afro-pessimism、アフリカに関する悲観主義)」という表現が生まれたのはこの頃なのです。30 年前に生まれた人にとって、馴染みのあるアフリカのイメージはその頃に広がったものです。つまり、疫病、内戦、飢餓、腐敗、依存といったものです。長年にわたって我々の多くは、こうした一般的な語り口を理解するのに苦労してきました。それらは少なくとも、実際にははるかに複雑なアフリカの現実を乱暴に単純化してしまいます。

ある者にとっては、それは冷戦の終結に関連していました。超大国の対立が終わった以上、アフリカと低所得国はもはや有効な将棋の駒ではなくなってしまったのです。また別の者にとっては、開発の成果が低調だったことが徒労感につながってしまったと言われていました。

アフリカという地域は非常に混乱していました。その頃が最も血なまぐさい時期だったことを思い起こしてください。ソマリア、シエラレオネ、リベリア、大湖沼地域の危機、ルワンダでの大虐殺などです。アフリカ以外の人で、彼らの言う「巨額の資金」をアフリカに投入した人は、徒労感に苛まれたとも言われています。

ドナー国は、自分たちの努力に対して見るべき成果はほとんどなく、開発の成果はひどく落胆させられるものだったと主張しました。少なくともそれが当時の論調だったのです。世界は離れていきました。アフリカは取り残されました。実際、これこそまさに私の国で起きたことでした。国連の平和維持部隊が駐留していたにもかかわらず私の同胞が何百万人も殺されていくなかで、世界は離れていったのです。

これが 1990 年代のパラダイムであり、論調でした。実際のところ、私が記憶する限りで、当時の重要なイニシアチブと言えば債務帳消しに関する HIPC（重債務貧困国）イニシアチブだけでした。債務の返済が不可能だということが明らかになった頃、私はしばらくのあいだ自国ルワンダの財務大臣を務めていました。私は当時の証人であると言ってもいいでしょう。

失われた10年間と「アフロペシズム」

要するに、1980年代が「失われた10年間」と呼ばれるのであれば、1990年代は控えめに言っても「希望のない歳月」、世に言う「アフロペシズム」の歳月でした。世界の注目は、自由市場に移行しつつある東欧に集まっていました。そして、1997年の金融危機にすら挫けることのないダイナミズムを持つように見えた世界の新興勢力、東南アジアです。世界有数のメディアの表現を借りれば、アフリカは「失われた大義 (a lost cause)」であり、「希望のない大陸 (a hopeless continent)」でした。

急速な前進

新たなミレニアムを迎えた時点でも、誰一人、アフリカにチャンスを与えることは出来ていませんでした。しかしそれでも、この頃に転機が訪れていたのかもしれませんが、1990年代におけるインドや1980年代における中国と同じように、です。驚くべきことに、しかし着実に、経済成長が人口の増大を上回るようになりはじめたのです。

経済は急速に拡大し始め、50年来見られなかった活気を呈するようになりました。幼児死亡率などの人間開発指標の劇的な改善も始まりました。2008年のグローバル金融危機に際しても、この新たな、加速する経済の鼓動は緩むことがなかったのです。

本日こうして皆さんにお話ししているあいだにも、アフリカは悲観主義を否定し続けています。経済生産は順調で有り、企業のあいだの雰囲気は非常にポジティブです。携帯電話革命が進行しており、通信、ビジネス、サービス提供を強化し、民主主義さえ定着させつつあります。サブサハラ・アフリカのGDP成長率は6.6%を記録するでしょう。輸出需要は盛んであり、外国からの直接投資は増大しています。中産階級の成長に引張られた順調な小売需要のもとで、都市は活気を呈しています。

たった一つの数値にも、恐らくこうした物語は集約されているでしょう。2000年、アフリカのGDPは6000億米ドルでした。10年後、その数値は3倍の2兆2000億米ドルになりました。実質ベースでも2倍になっています。10年でGDP倍増というのは近年の中国、インドで見られた状況であり、それが今アフリカでも起きているのです。統計上の話ではありますが、産業革命の時期のイギリスの場合、同じようにGDPを倍増させるのに150年もかかったということを思い起こしてください。

現実に即しているのだろうか、と疑う人もいるかもしれません。そうした疑問はある程度は理解できるでしょう。結局のところ、アフリカは一つの国ではありません、54カ国もあり、時間をかけて国民国家が形成され、国境が画定されてきました。この大陸は依然として分断されており、膨大な貧困層と、スキル及びインフラの面でのギャップを抱えています。こうしたギャップが埋められなければ、持続的な前進が阻害されてしまうでしょう。

電氣を利用できる人はアフリカ住民の40%にすぎず、村落地域ではその数値は大幅に低くなっています。さらに、暴力的な紛争と不安定に苦しむ大きな地域も残っています。アフリカ住民の20%、つまり5人に1人はそうした国で暮らしています。しかし、そうした危機は国境のなかに封じ込められているわけではありません。近隣にも大きな経済的・社会的コストを強いています。皆さんがしばしばテレビでご覧になっているのは、こうしたことでしょう。これらの状況が、サヘル地域、「アフリカの角」地域での現実で、ソマリア沿岸の海賊も現実です。

要するに、アフリカは今や、非常に変化しつつある大陸なのです。非常に大きな前進も見せています。しかしその一方で、克服しなければならない大きな問題もあります。格差は広がってい

ます。雇用創出のスピードは十分ではありません。要約すると、アフリカ大陸は成長を変革に転じるという課題に直面しているのです。

こうした課題については後でまた触れたいと思います。アフリカが克服しなければならない障害をもっときちんと評価するためには、この大陸で進行している新しい動きの背後にある力学に着目する必要があります。では、この劇的な転回の背後にはどのような要因があったのでしょうか。

「群盲象を撫でる」ということわざのように、説明は非常にたくさんあります。そして皆さんご存知のように、我々エコノミストは、事後的に出来事を説明する才能に非常に恵まれております。しかし現実には、1990年代のインド、1980年代の中国の場合と同様、単一の説明はありません。単一の要因ではなく、組み合わせなのです。とはいえ、特に目立つ要因が4つあります。

第一に、経済の調整と痛みを伴う改革の時期であった1980年代の間に、マクロ経済の安定の基礎が築かれ、民間部門の活躍する余地が拡大していたことが分かっています。このいわゆる「失われた10年」は、実際には、種を蒔く時期だったのかもしれない。

第二に、1970年代のアジアと同様に、人口動態が大きな役割を果たし、これは今も続いています。つまり人口が増大し、それもただ急速に増大するだけでなく、若年層が増えています。しかも若年層が増えているだけでなく、都市人口が増えており、ITの利用度も高くなっています。これが、小売から建設、金融など、文字通りあらゆるセクターにおける国内需要と投資を加速させています。

第三に、新興市場からの需要及びアフリカ域内貿易に刺激された、順調な輸出実績があります。

第四に、天然資源市場の好況です。過去10年、石油から天然ガス、貴金属・卑金属に至るまで、膨大な量の天然資源が発見・開発されました。

以上の要因すべてに加えて、アフリカ大陸がこれまでよりも安定し、ガバナンスも改善されてきたこと、過去のいかなる時期に比べても経済的に予測可能性の高い政策が行われていることを指摘しておくべきでしょう。

成長の質・持続可能性という課題

数十年間にわたる衰退を逆転させた今、アフリカ諸国は成長の質・持続可能性をめぐる問題に取り組まなければなりません。これはどの地域にとっても課題でしょうが、特にアフリカにおいては決定的に深刻であると申し上げておきましょう。

我々が対処しなければならない第一の課題は、経済的な持続可能性です。今のところ、成長の原動力がかなり限定的で、経済構造の改革のスピードも十分ではありません。一部の国は、あいかわらず限られた範囲の一次産品に過度に依存しています。これには二つの意味があります。

これらの部門は一般に資本集約的ですから、雇用の創出は非常に限定的で、往々にして、いわゆる「オランダ病 (Dutch disease)」につながります。経済の持続可能性との関連では、インフラの問題、そして限定的なスキルベースという問題があります。アフリカ諸国の成長につれて、あらゆる分野で、エネルギー利用の制約、高い輸送コスト、接続性の限界といった問題が立ちはだかっています。

アジア地域では、高度成長の初期には、健全なインフラ [整備] がそのプロセスをおおいに牽引し、ビジネスのコストを引き下げ、市場を機能させるようになりました。だからこそアフリカ開発銀行でもインフラを非常に重視しているのです。日本が JICA 及び JBIC を通じて、我々と同じようにインフラを重視してくださっていることを私はおおいに歓迎しております。

インフラの問題は、複数国にまたがるインフラの場合にはいっそう深刻になります。54カ国で

構成されるアフリカ大陸においては、大陸内部での貿易が優先課題となります。したがって、輸送のための幹線、効率的な海運用の港湾、鉄道、空港、ブロードバンド回線などのニーズが生じます。ここで改めて、「シングル・ボーダーポスト」¹など、経済統合という問題に関する JICA との協力を敬意を表したいと思います。今後とも協力が続いていくことを期待しております。

スキルの開発と教育機会の拡大については大きく前進したとはいえ、それでも、現代的な経済を動かしていくために必要なスキル全般 [の不足] によって、アフリカの経済発展の持続可能性は制約されています。これが最も痛感されるのは科学・テクノロジーの分野です。したがって、この領域での協力が拡大していくこと、ある種の分野では新たなテクノロジーを利用してリープフロッグ²を実現することが期待されます。

第二の課題は、社会的な持続可能性です。「アラブの春」は、一つには、インクルージョン（包摂）が不足していたことで生まれた苛立ち [の現れ] です。経済成長が幅広い機会を提示しないのであれば、つまり成長の原動力の性質又はガバナンスの失敗のために経済成長から人口の相当部分が排除されてしまうのであれば、それは機会の無駄遣いというだけでなく、持続不可能なものになります。

アフリカのように人口構成の若い大陸においては、社会的な持続可能性が経済成長の柱になります。公正さという感覚、公正かつ公平な社会という感覚があれば、政治的な安定の基礎が生まれ、「ステークホルダー経済」とでも呼べるものが生まれます。だからこそ、AfDB の新たな 10 年戦略において「インクルーシブ（包摂的）な成長」が柱になっているのです。

持続可能性の第三の側面は、天然資源に関するものです。アフリカでの生活は自然と非常に緊密に結びついており、アフリカ経済の持続可能性は、農業や土地、海洋資源をめぐる状況と深く関連しています。人口の 60% がバイオマスからエネルギーを得ている状況ですから、自然資本の保全は重要です。

気候変動の結果、アフリカの一部が砂漠化の進行に悩まされる一方で、洪水や予測可能性の低い季節変動に苦しむ地域もあります。新たな疾病が登場し、生活はますます脆弱になっています。だからこそ、エコロジ的に持続可能な開発こそが、アフリカの豊かな天然資源を活かして化石燃料消費の少ない成長と自然資本利用の最適化を実現するという自然な道なのです。「横浜宣言」がこの件を重視していること、国連大学との協力の機会があることを私は非常に歓迎しております。

終わりに

長年にわたって、アフリカは、アウトライヤー（統計上の異常値）という偏見のもとで考えられてきました。しかし今やアフリカは、若くダイナミックな、ビジネスと投資に開かれた大陸という論調で語られています。グローバル経済の成長が低迷している今、おおいに必要とされている経済的エネルギーを供給しているのは新興市場です。多極化された世界は、力強さと多様性の源泉も多極化されていることが判明しているのです。

若く増え続ける 10 億の人口と、拡大する中産階級をもつアフリカは、良い方向への要因にしかありません。その過程で克服しなければならない障害もありますが、インフラなどその一部は投資の機会も生み出します。現時点での世界は、新たな、多様な成長の源泉を必要としています。再生するアフリカは、すべての人にとって機会を提供しています。TICAD 横浜宣言は、

¹ 【訳者注】「ワンストップ・ボーダーポスト（OSBP）」と呼ばれている国境手続簡素化の取り組みを指すもの。

² 【訳者注】固定回線の段階を飛ばしてモバイルネットワークを実現するなど、技術の発展段階の一部を省略して新たな技術を採用すること。

日本とアフリカが相互の利益とグローバル経済の回復のためにどのように協力していくかという方向を示すものです。アフリカ開発銀行は、その取り組みのための恵まれたヴィークルとして、その役割を果たしていくことになるでしょう。

ご清聴ありがとうございました。